

山の先輩たち

辻村伊助を中心に

——なべての山頂に安らぎあり ゲーテ——

伊藤 秀五郎



昭和51年(1976年)

2月号(No. 368)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

山の先輩たち

——なべての山頂に安らぎあり——

- (伊藤秀五郎)(1)
 百名山随想(小倉 厚)(2)
 あるガイドの死(管見愛子)(4)
 剣岳遭難慰霊碑建立に際して
 (浜田文二)(5)

山を歩く

- 雪深い飛竜山(沼倉寛二郎)(2)
 荒島岳(川北 仁)(4)
 カリガンダキ回想(川崎精雄)(3)

図書紹介

- 「山は満員」(6)
 「朝日連峰」「吾妻連峰」ほか(6)
 「星空の北壁」(7)

ナンダ・デヴィ通信

ナンダ・デヴィ縦走計画

会員報告・委員会報告

- ソ連でスキーを
 一原蕃氏の手紙(8)
 梓会年次だより(8)
 ルームで忘年会、70名の参加(9)
 北海道支部新年小集會(11)
 小林義正氏をしのぶ(9)

その他

- 会務報告、会員動向、海外通信
 お知らせなど(11),(12)

僕は正十一年北大に入学した年に、偶然古本屋で、辻村伊助の『スウィス日記』の、フランス綴の初版本を手に入れた。僕の愛読書の一つになったが、著者が小田原に住んでいることを知って、一度訪ねてみようと思っていたうちに、十二年の関東大震災の山津波で、辻村さん一家が土の底深く埋没したので、僕の辻村さんに会う

機会は永久に失われた。
 数年後、日本山岳会に入会してからは、小島島水、高頭式、木暮理太郎、高野鷹蔵、武田久吉、田部重治など、山岳会の大先輩に親しく接する機会に恵まれた。ことに小島さんと高野さんは、僕の従兄と親交があり、同じ横浜育ちという気安さも手伝ってか、世田谷のお宅にはよく邪魔した。
 小島さんは、所蔵の陶器や書画なども見せて下さった。小島さんのアメリカ在勤時代に蒐集した浮世絵とエッチングのコレクションは有名で、趣味で集めた愛用品なのに、横浜の税関でひっかかって大問題になったことがある。小島さんには蒐集癖があつて、晩年になつても、「旅先から届く荷物は、きまつて主に瀬戸物なんですよ」という奥さんの話だった。
 高野さんには、若いころ昆虫の専門的著書があり、ローラーカナ

リヤを日本に普及させた元祖でもあつて、世田谷時代はカナリヤに熱を入れていた。横浜の宿屋の跡取りが、どうして博物学に凝るようになったのかは、聞き洩らした。見るからに古武士の風貌の木暮さんは、来たる者を拒まずという人柄のようだった。硬骨漢ではあつたと思うが、木暮さんの怒つた顔をみたことはない。その点、皮肉を笑しむ風のあつた武田さんとは対照的だった。武田さんは、頭の鋭さは人一倍で、植物学の権威だったが、その毒舌は、時に聞くものを辟易させるほどだった。木暮さんは、かつて『山岳』の書評で、僕の学生時代に書いた北千島の旅行記を、好意的に紹介してくれたことがある。初対面のとき、もう少し逞しい山男を想像していたのか、白面の書生の僕をみて、「驚きましたね、伊藤君は思ったより若いので」と、ほんとうに意外だったらしい。これは余談だが、

昭和四年に改造社から出た『日本地理大系』の山岳編に、「樺太・千島・北海道の山」という一章を、当時大学に在学中の僕が受持つたが、他の執筆者は、小島、木暮、武田というような古い年代の大家ばかりなので、僕も相当の年輩者のように誤解されたことがあつた。もっと滑稽だったのは、動物学をやっている僕と、山登りをする僕とは、同姓同名の違った人間だと思つていた人があつたことだ。
 木暮さんは、「伊藤君は田部(重治)君のものなども丹念に読んでいるそうだから、あまり話すこともありませんね」と笑いながら、しかしこの山の大先輩は、いつも山についてもっとも実のある話をしてくれた。孫に昔話でもきかすような風があつた。

ナンダ・デヴィ縦走を成功させよう

しかし、僕は辻村さんとは、ある因縁があるのである。山に直接関係のある話ではないが、——それは、僕の長兄の信太郎が、一高・東大で辻村さんと同学年で、一高では寮で同室のこともあつたのか、親しかったらしい。大学は辻村さんは農科、兄は工科で専攻は違つたが、三年間、本郷の同じ下宿で暮らしたそう。長兄は辻村さんと同年だから、僕よりだいぶ年長で、僕が小学校時代に大学を卒業した。一高時代から、学校の成績は良かったらしいが、偏屈で、交友もあまり多くなかつた。一高時代、誰かに白墨で背中にバカと書かれたマントを着たまま、横浜の家に帰ってくるのだが、一度ならずあつたと、母がよく話していた。母親にしてみると、連れ立って歩くわけではなくとも、な

そんなわけで、山の多くの大先輩の警咳に接する機会のあつた僕が、今でも残念に思うのは、親しく接する機会のないうちに長逝した辻村伊助と板倉勝宣の二人である。とかく圭角のある人の多い山岳人のなかで、この二人が、善良でどこか超俗的でしかも味わいのある人柄だったことを知っているからである。

十年間「百名山」への一筋の道をあゆみ続けてきたが、五十年の八月下旬、黒岳（水晶岳）をもって一応完了した。思えば厚い友情と多くのエピソードにあふれた長い歳月だった。

私のいう「百名山」とはもちろん故深田久弥氏選定の百名山を指している。この百名山はさすがに深田さんが長年の学識と実際に自らの目と足で確認された上で選定されただけあってすべて立派な山ばかりであった。その分布も北は利尻岳から南は宮ノ浦岳にいたるまでほとんど全国的であり、これに登ることは単に山岳を知るのみにとどまらず、これらの山旅を通してわが国を知る上にもひとつのよい指針ではなからうか。しかも海外遠征と違って、暇のないサラリーマンでも地道に登り続けることができる。

世にかくれた百名山ファン、深田ファンは多いと思う。事実、山行中にそれらの人々に再三ならず会っている。それらの人々の中には既に百名山を完登された方もあろうかと思うが、まだされない人は、かつて私がそうであったように、今までいくつ、あと残るは幾山、と指折り数えてそっと胸に秘めてただ一途に登り続けることだ

百名山随想

小倉 厚

その山行はまたいつまでも印象深く心に残っているものである。その意味で、まだ知床プームにならなかったころの悪天をついての羅臼岳の登山、難渋を極めたトムラウシ、日高幌尻岳は印象的だった。

東北の山々は二、三の例外を除いて概して晴天に恵まれ快適

ろう。全国のこれらの人々を一室に集めてクラブをつくるなり、座談会でも開いたら大変面白いのではなからうか。

今ここに百名山の山旅をふり返ると、かつて深田さんが登られた当時と較べて交通事情の変化に伴って登山の対象としてはいささか物足りない山もなくなっている。例えば岩木、八幡平、筑波、草津白根、美ヶ原、霧ヶ峰、立山、乗鞍、木曽駒、伊吹、大台ヶ原、剣山、阿蘇、霧島などがそれであろう。しかしこれらの山々も歴史的にも、あるいは山の品位からみれば劣らぬ堂々たる名山には違いない。

山は最近登った所が一番好きだと深田さんはいう。まさしくその通りで時の流れとともに記憶や印象は風化し去って行く。それでも困難を極めた山行、逆に素晴らしい天候と親しい岳友

んとなく気恥かしい思いがしたのだらう。不器用で、碁でも将棋でもトランプでも、ゲームをやっている兄弟中いちばん下手だし、スポーツも不得手で、趣味といえば写真と旅行ぐらいのものだったが、たいへんな読書家で、文学書なども一通り読んでいた。

これも余談で、辻村さんとは関係のないことだが、兄は小学生時代に、漢学塾で漢書をかなり読まれたらしい。僕は小学校の四、五年のとき、兄から日本外史を習った。兄も使ったことのある和綴の二十四冊本があつて、僕はその一、二巻を読んだ。週末に家に帰ってくる兄に読んで貰い、その次のときまでに暗記しておくというやり方だった。日本外史は名文だから、音読すると、子供の僕にも調子のよさが分って好きだったが、今になって思うと、僕はどうも、作文の要領を、日本外史で覚えたようだ。つまり、措辞の配置、言葉の選択、文章のリズム、抑揚、格調というような、文章構成の骨組みを、理屈でなく、感覚的に会得したような気がする。

その兄が、どうして辻村伊助と大学時代親しくしていたのか。二人が同県出身ということに関係なかったようだ。兄は人付き合いも下手だったが、友人として無害な人間ではあったらう。察するに、兄にとって辻村さんは好まし

い友人であつたに違いない。兄は大学を卒業して会社に勤めるようになると、花作りに熱中しだし、この趣味は生涯続いたが、これはどうも大学時代に辻村さんに影響されたのではないかと、僕は想像している。

兄は大戦後、山梨県の疎開先で丹毒で急逝した。僕たちの父は、庭造りが好きで、年中植木屋がはいつていたが、花壇を作ったことはなかった。それが兄の代になると、庭の一部に花壇を作って、朝夕自分で熱心に世話をした。父は僕の小学校三年のころ健康を害し、仕事もやめ、家も兄に譲って横浜根岸の別荘に移った。長兄、次兄を除いた子供たちも、父母と根岸の家で暮すことになったが、ここは当時は郊外というよりはまだ田舎だった。前の山手の家から歩いて一時間足らずの距離だったが、家は東京湾を見下す景勝地で、土

山を歩く

雪深い飛竜山

沼倉寛二郎

春分の日誘われるまま飛竜山に特別参加する。ここ三条の湯ルートは東京国体雲取山以来の山行である。朝方まですごい雨だったので出発をためらっていたが、次第に天候も回復しそうな気配なので、急ぎ定められた立川駅ホームへ。

心配そうに今日のリーダー氏が待っていた。定刻の八時に六名全員が集まる。終点奥多摩駅につくなりお腹がすいたと言つて駅そばに駆け込むもの。腹ごしらえが終る頃お祭りのバスが来る。左側に沿って満水のダムを眺め

地もあったので、野菜も花作りも自由にできた。一反ほどの畑は、年寄りの下男がやっていたが、花壇の方は、主に僕の仕事だった。長兄に花作りの手ほどきをして貰った。僕が花作りが好きになったのは、兄の影響が大きかったのではないかと思う。子供のころから田舎の静かなところに住み、花作りや、草木や昆虫などに親しんだことが、将来、生物学をやったり、山登りに身を入れたり、花の詩を書いたりする素地になったような気がするのである。もし、こういう辻村―長兄―僕という関係の図式が当てはまるとすれば、辻村伊助は僕にとっては、間接ではあるが、大切な先輩ということになる。あの清澄な名文を書いた未見の作者を、いまなおなつかしく思う心が強いのは、そのためである。

(五〇・四・一〇)

な山旅が多かった。ここでの印象的な山はなんといっても東北アルプスの異名をもつ、飯豊、朝日の両連峰であった。ともに静かなしきも美しい紅葉の中を登った。

関東周辺では皇海と平ヶ岳であるが、両山とも深山幽谷の気に満ちていた。そのほかここで意外によい山行だったと感心したのは両神の西岳だった。

中部地方には百名山の半数がここに集中していちいち上げる位とまではないが、剣、黒部五郎、黒岳、槍、穂高、笠、白山、空木、鹿島槍、五竜そして南アの山々、どれひとつとっても私に強烈な印象を残している。とくに南アの赤石、悪沢の山行は三〇キロを越すリユックの重圧に耐えて小沢川の遡行、大聖寺平への登高はつらく厳しい試練でもあった。またこの地区には深田さんの白山と同じようにわが故郷の魂の山、魚沼三山もあり、別の意味で思い深い。

近畿以南には名山は少ないが強いて印象的だった山行を上げるとすれば四国の石槌、九州の祖母、最南端の宮ノ浦岳ではなからうか。三山とも天気に恵まれたよい山行であった。

しかし、私のこの百名山紀行も決して順調ばかりに行っていたわけではない。悪天に悩まされ何

回も何回もひとつの山に挑みづけてようやくくじしてその山頂の三角点を見いだした山は数知れなくある。確実に山頂に立たなければ登ったとはいえない。したがってこの十年間の山行は優に三〇〇回を越えた。その間二年間、この『山』の編集も、暇のない私にはかなりの山行回数を減らさなければならずかなりこたえたことも今となってはよき思い出のひとつでもある。

残念ながら私は生前の深田さんの譬喩に接する機会はなかった。ただ山岳会の諸先輩の話や書かれたものからその人柄を偲ぶのみであるが、深田さんは私に実によいひとつの目標を与えてくれたものと今感謝している。他人様がみればささやかなものであろうが、ここに私としては私なりに生涯のひとつの大きな事業を完結し得たことに満足し、八月下旬よりその全紀行文を綴り約一、二〇〇枚の原稿となった。今はどこかこれを本にしてくれる奇特なところはなにかと思索中でもある。

まだまだ私は日本をよく知らない。ほとんど無限に近い百名山選外の山々を求めてこれから生涯山をさまよいつつ続けようと思っている日々である。

(昭和50・10月記)

ながらゆられ、お祭で下車する頃、しだいに快晴になる。三条の湯まで後山川に沿い、よく整備された林道を遡行する。国体コースのときより一段と道幅も広くなり、ことに東京の水源地域の関係からよく監理された立派な車道である。青岩谷出合近くになる手前、今しがた崖が崩れたらしく、通行の不能箇所を過ぎ、山道を伝い「ここでアイゼンをつけて下さい」と指示されたところから道は二、三カ所凍結してアイゼンをつけない私たちには少々きもを冷すところもあった。

青岩谷出合の橋を渡る手前で車道が終り原生林の山道右手高く三条の湯が見えて来る。橋を渡る下り道は凍結して心配であったが、幸い固定ザイルに救われ、予定通り三時前に寒々とした小舎に入る。(一人当り千円を払う)

自炊夕飯が済んだ頃ドヤドヤと入り込んで来た数人の話によると、腰までもぐり、ラッセルに相当苦労したらしい。この一行で大部屋も満員になる。気をつかっている小舎の主がどうぞお湯に入ってくださいと懸命なサービス振り、待ちかねていた若人の数人が入りに行ったきりいっこうに帰って来ない。気の早い一人がとてぬるくて出られないと泣きごとを

言って出て来た。私たちはあきらめて、冷えきった一枚のフトンにもぐり込んだが寒くて眠れそうにない。

翌日も晴天、八時前に小舎を出発する。小舎の主から途中数カ所凍っていること、アイゼンのない人が昨日帰って来ましたがらとどかさねすかされる。慎重に急な山腹にとりつき高度をかせぐ。登

カリガンダキ回想

川崎 精雄

ヒマラヤ晴雪煙つぎつぎ雲となり御経誦しポーター氷柱の崖よぎる凍ててなほ黄塵チベットへ向ふ道水涸れて隊商峽の底を行く壁に塗り牛糞はせる冬がまへ牛糞焚く炉辺ほろの如児の眠る禿わしの翼を吊るし鳥おどし枯草の丈低くヤク食み得ざる河原湯の全裸ゆるさず岳より雪

クリスマスツリーに圧倒される。登りがゆるやかになった。ヒザ上までもぐる樺谷の源流を横切るとまたしても凍結して足下は危い。前方の飛竜山を眺めているとうっかり足がさらわれる。尾根を登り切った北天のタルに、十一時ちょっと前に辿る。とき折りのすごい雪煙をさけて早い昼食の準備をする。ここから約三十分余りで飛竜権現に詣り、やっとの思

いで雪をふみわけた展望のきかない山頂を後に権現に戻る。この稜線から前飛竜まで全くふみ跡がない。ためらって動かない一行の三人組を後にして、元氣ものの若いわがパーティが先頭に。腰まで、ときに肩までもぐるラッセルの連続である。足下は凍結しているのときたま両足をさらわれ、あわやの冷水をさらわが、一時間余り前飛竜にどうにかたどりつく。このような深雪の山行には少なからず体力の限界を感じた。積雪期外の春秋季節にはこの素晴らしい自然林の新緑に紅葉にさぞ見事なたのしい山行の出来る尾根に違いないと思いが不安定な山稜に足をとられつつすべり下りる。つねに樹林を通した左側に雲取の山頂を眺めつつ二時間近くも残雪の尾根に苦労して、見覚えある落ちついたサオラ峠に出る。ずいぶん

山を歩く 荒島岳

川北 仁

ラッセルで道草したので、四時のバスをあきらめ大菩薩連山をめながらゆっくり丹波の部落に五時前に下りる。

出がけに用意していた三本のアイゼンとスパッツをうっかり忘れたことが悔いられる。前週生藤山

の残雪の状況を知っていたばかりにかえって誤らせ、少々甘く見たことが深く反省させられる。しかし、しばらくぶりに思いもよらない現役並に自分自身にしごかれ、早春に深雪の素晴らしい山行であり、貴い経験であった。

『日本百名山』はある意味では登山ブームを招いたといっても過言ではない。大野市役所から届けられた観光用パンフレットには、日本百名山のひとつとして荒島岳が紹介されてあったし、勝原の民宿で見た落書帳（宿が宿泊者に任意に書かせたもの）にも東京の某氏は次のようなことを達筆でしたためている。

明日は荒島岳。東京に生れ東京に育って日本の山といわれる山を歩いたが、荒島岳なる山名は三十五の年まで知らずにいた。深田久弥氏の日本百名山を知るに及んで彼の推す名山ならばとはるばる越前に運んだ。

今夕山に多少の雲あるとは言へ明日も好晴ならん。未知なるが故に希くば名山たるの風格と重量をかねそなへておらん事を。——原文のまま

荒島岳の名は知っていたが、二

月に大垣のベテラン山葵会発行の『奥美濃』を手にするに及んで無性に登りたくなった。菜種つゆが一週間近くもつづいて天気図ばかり追っていた四月下旬のある日、久々に晴れるだろうとの予報が出たので、朝急いで支度を整えと名古屋駅発一〇時のしらさぎ二号にとびのった。

福井から越美北線、そして勝原で下車、民宿に入る。夜外に出ると、前の山の上にはぽっかりお盆のような月が出ており、明日の好天を約束していくれる。明るく朝早く宿を出る。勝原スキー場を登りつめるとだんだん急坂になる。若芽の小枝に顔を叩かれながら歩きつづけると、折からの陽光で額から汗が流れる。間もなく登山路は雪道になる。雪はしまっていてかんじきに用はなさそうである。小荒島の手前は急な登りでピッケルに体重を托して慎重に登る。

立木の根元はもうスリ鉢状にえぐられていて雪だけを暗示しているが、一面の雪が消えるのはいつのことだろう。小荒島から白一色の白山展望はすばらしい。かなりの風に快い汗の発散を意識しながら、シャッターを押し続ける。碁盤の目のような大野盆地、蛇行する九頭竜の流れ。今日の好天候ではすべて絵はがきを眺めるようである。

小荒島から少し下ると再び急坂になる。よく見ると雪の下に鎖が見える。鎖場なのである。しかし長い距離ではない。此処を過ぎると、時折熊笹の道になるが、もう荒島岳の尾根を歩くことになる。

壮大な雪の崖である。ゆるい上り下りはあったが、ここは展望をほしいままにする荒島の遊歩道とも言わば、いつまでも飽きない登りであった。頂上では強風に身をさらしながら撮影に余念がなかった。白山、越美国境の山々、残雪に彩られたそれらのピークは、何度かカメラの被写体になった。

雪の壁に身を寄せて昼食をとった。携帯ラジオのスイッチを入れ、今夜からお天気が悪くなる、と言う。今日山に來た好運に微笑する。山頂には一時間ほどいた。下山は来た道を下ったが、調子の良い登山に意外なハプニングが待っていた。とある林の中で滑り、前向きに転倒、左肩に掛けていた望遠レンズのケースで左胸を打っ

たのである。一瞬呼吸が止まる痛みを覚える。山での自戒を促すいい葉になった。

麓の銀嶺荘で罐ジュースを買ったら、売りのおばさんが昨夜山頂で泊ったかと言う。今朝登ったと答えると、早いですねエとおどろいていた。勝原の里は桃の花、山ざくらが美しかった。越美北線で九頭竜湖まで出ると、美濃白鳥へのバスがあるという。美しい舗装道路を蛇行するバスに身をゆだね、雪どけ水をたたえた九頭竜湖の景観に見とれていると、間もなく越前美濃の国境油坂峠にさしかかる。そしてすぐ美濃白鳥の町であった。

死のガイド

子愛見 答

光を含んだ無数の緑の玉がそこら中にちらばっているような朝のアルプ。アルペンローゼが叢れ咲き、足許にはエンツィアンが控え目に紫の首をかしげている。チロチロチロ歌っているような小川の流れるほとりに牛が草を食み、カウベルがまるで山彦のように、あちこちからひびいてくる。

メルヘンヴァイゼとでも呼びたいようなそのアルプのうしろに、ヴェッターホーンが対象的な岩肌を見せ、さらに後方にはアイガー、メンヒ、ユングフラウが真白な山稜をのぞかせている。

そんな夢のような風景の中で、私達はブルーノとザイルを結びあい、楽しい岩登りのトレイニングをした。

その近くにはまた、彼の好きな場所があった。ここへ来る途中わざわざ寄り道をして案内してくれた所は、たしかに彼が推奨するだけあって、ここから見るヴェッターホーンは実に魅力的な山容を見せている。それ以来、私はヴェッターホーンが大好きな山になってしまった。それはまた、彼の好きな山でもあった。

午前中のトレイニングを終ってランチタイムのひとときなど、彼はスイスのヨーデルをきかせてくれた。時には合唱をしたこともあった。トレイニングを終えての帰途、彼はマイクロボスを運転しながら、精悍な顔をほころばせている話をしてくれたし、時として私のために峠のコーヒー店に立寄って、面白い歌のレコードを聞かせてくれたりした。

明るく陽気な彼であったが、山に対しては実に慎重で、きびしかった。氷河でのステップカッチングの訓練の時も、一つ一つ点検して、やり直しをさせられる者も

いた。私はその時七人の中で唯一の女性であり、かつ五十七歳という年齢でもあったので、もしかしら他の人よりカッティングの数を少し少なくしてくれるかしらなどと甘い考えを持っていたが、彼は決して女性だからと云って甘やかしてはなかった。しかしすべてをやりとげた時、ニコニコしてよるこび、ほめてくれた。

ある時のこと、ヒュッテを出発する前に私が一寸用足しに行っていたところ、出て来たら彼が近くの下り口の所で待っていた。私のザックとピッケルも持っていて、「すぐこのまま下ろう」と云った。私は小屋のオバサンと別れの挨拶をしたかったが、彼にせかされるままそこを下ることになった。大分岩場を下ってから小休止をした時、カメラをとり出したところ一つしか入っていない。彼に聞くと「テーブルの所にあったザックとピッケルだけを持って来た」という。もう一つカメラがあったことは知らない、自分でまとめておかないからいけない、というようにことを云われた。私は小屋へ寄ってから出発するつもりだったの

で、まだ完全に荷物をまとめていなかったのだが、そんな云い訳をドイツ語で説明することも出来ないで諦めることにした。彼は、あとから下ってくるアシスタントコーチに取り戻せると云ってくれたが、私は「一つあれば大丈夫

だから、戻らないでも良い」と答えた。ところが幸い、後発の仲間が私のカメラを持って来てくれた。それを見た瞬間ブルーノはホッとしたらしく、満面に笑みをたたえながらいきなり私を小脇にかかえて、私のお尻をビシヤビシヤと叩いた。それはちょうど、親子供におしおきをする時の仕草だった。私はこの年になって、それも西洋式のおしおきを受けようなどとは思ひもよらないこととて、今思い出してもほえましくなる。

そのブルーノが、山で死んだ。それも、遭難救助に出動の途中ヘリコプターが墜落したために。つまり二重遭難の由。

彼は三十四歳になっていたはずである。ますます技術的にも精神的にも成熟したガイドとなっていたであろう彼。私はローリーから彼の死を知らせた手紙を受取った時、身体がたたくるのを覚えた。山で事故を起こした人達が、うらめしいような気さえた。その事故がなかったら彼は死にはしなかったのに……

クリスマスに送ってくれた彼の写真を、私は改めて眺めた。アイガーをバックに、スキーをつけた彼の素晴らしい姿を見ながら、もう再び会えないのかと思うと思わず涙が溢れた。

彼のガイドで、一度はヴェッターホーンを越えたいと思っていたのに、もう叶わぬ夢となってしま

った。どこの山で彼は眠っているのだらうか。私はその山に花束を置きに行きたいと思っている。エ

剣岳遭難慰霊碑建立に際して

浜田 文二

剣岳の麓に生れ、その偉容を仰ぎながら、過去の思い出をたどり、行動を共にした人たちの中でも、目的を果たし得ずして散華した友人のこころなどを思えば誠に痛惜に堪えません。最近とくに、遭難の多いことは残念の至りです。親族友人の方々が、その哀惜の気持ちを石や銅板に記し、それらは大きい石や岩にはめこまれています。数が多くて、この先はこむ場所

ンツィアンの咲く頃に、その一輪を添えて。



慰霊堂の前に立つ碑石

もありません。自然環境保護の立場から国・県の要望もあり、かねてより合同慰霊堂の建立を念願しておりましたところ、幸い私たちの上市ライオンズクラブが、奉仕事業としてその建立にあたることになり、剣岳早月尾根登山口の馬場島に総工費三五〇万円余をかけ、昨年七月中旬に着工、十月五日除幕式を終えることができました。この間、上市町、上市警察署、富山営林署、県公園緑地課、県土木事務所その他のご協力を賜りました。堂内に祀る遭難者の名簿は、上市警察署より記録をいただきましたが、遺族の住所、お名前も明確でなく、これをお読み下さった方

で知人等がありましたらお伝え願ひ、左記の要領でお知らせ下されば幸いに思ひます。本年より合同慰霊祭を催し、祀られた方たちの生前を親しく偲んでいただく考えであります。

なお、正面の塔の石に「試練と憧れ」と彫刻してあります。

す。書は日展作家吉田帰雲氏の力作です。碑のうしろに堂が建設され、内部には、金襴の特別表紙に吉田氏の筆で「鎮魂」と書かれた立派な和紙製の名簿が桐箱に納められ、さらに厚い銅板の外箱に入れられておそかに安置されており、後に続く山岳人の安全の守護神として祀られています。

ご連絡いただきたい事項は
一、遭難された方の姓名
一、ご遺族の住所氏名
一、遭難の場所および年月日
一、その他参考事項(例・日本山岳会ほか所属名など)
連絡先 富山県上市町森元町上市商工会議所内

副碑碑文(上市ライオンズクラブ) 遠き神代の昔より変る事なき山の峯々と萬古の雪を湛えて繁吹に岩を咬む状を現世に残す中部山岳国立公園剣岳の山々溪々苦難に打克ち溪を渉り山を攀りしが敢えなくも事成し得ずして之の山溪に眠る若人を偲べば実痛恨の極み而れども高き志を御名と共に千萬世までも残し伝へむと此の社殿に納め奉り神鎮りまして後に続く山岳人達の平穩を天翔り国翔り守らせ給え「憧れる心に試練があり、試練を超えて其の道を歩き続けん」私達は自然の中に生き抜く山岳人の安全と散華した御魂安かれとの願をこめて之を記す

渡辺公平 著

「これでもジャーナリストのはしくれ……」と著者は「まえがき」で述べているが、はしくれどころか長い年季がはいっていることは、その登山歴と同程度なのであるから、今さら筆の巧みさを云々するのも気がひけるくらいである。「甲州七面山」「相州大山所見」などの小さな山歩きでさえ、楽し

暖かな人柄につつまれながら読みふけている折に、ときどき眼を射るのは、自然美を破壊するものへの著者の鋭い批判である。

布装三五六ページ、一九七五年十月、茗溪堂刊、定価二二〇〇円

この一連の総合学術調査報告書のうち第四輯『鳥海山・飛島』が最初に寄贈され、織内副会長の指

私がこの三連峰の本を、書評をつけて図書委員に渡した直後、発刊されたばかりの第五輯『出羽三山・葉山』が山形新聞社から惠贈された。こうして全シリーズが完備して本会に所蔵されることになったので書評も別々にせず、この『出羽三山』と先の『鳥海』も含めて五輯分を一括して書直させてもらい、この文にした。各自治体とも財政難に喘ぐ時勢下で、この有益な調査・研究が完遂され、貴重な成果が刊行されたことは好運で、関係各位の十六年にわたる努力に敬意と感謝を表するものである。

「鳥海」の大平調査団団長のはしがきに、「出羽三山」地域が終れば「県下六峰」といわれる県境、県内の山地はおおむね一段落とあるから、第五輯で終るならば残るのは蔵王であろう。蔵王は開発、破

自然の汚損を防止し復元をはかるのに登山者として応分の役目を果たすため破壊の大きな力に立向うには知識という武器が必要であ

り、知識を得るにはこのシリーズの如き専門家による本格的調査報告書の勉強が役立つであろう。昭和三〇年に宮城県から「蔵王連峰學術調査書」が出ている（朝日連峰「本田正次氏の序」）そうであるが、『出羽三山』の座談会記事の

「通説に貴重な反証」の項等に述べられているように何度の調査にも新発見はあつて決して無駄ではあるまい。學問に國境はないはずながら、何か差障りでもあるなら、お釜や刈田岳以南は隣県や東北大學にまかせて、馬の脊・熊野岳・名高峰までの蔵王では狭過ぎるから、県境を雁戸・蛤―面白と北へたどれば一五〇〇メートルかきりの船形山に至る。黒伏の大岩壁や層雲峡等見事な溪谷を抱くこの船形山群だけは、せめて奥羽脊梁

「出羽三山」に「葉山」を組合わせた先例と、その輯の服部名譽会長（山形新聞社長）の序文の最後に「いままた、県北の神室、加無山系に踏査研究を進められていくと聞く」とあるのを心頼みとして、登山者としてこの望蜀の願いを申したわけである。

さて、この報告書シリーズは、B5判、紺色の表紙は『朝日連峰』のみ紙装、他は布装、非売品。（有償頒布可能もあり、問合先は後記した。）

輯書名		調查期間		發行年		頁數
1	朝日連峰	昭34	38	昭39		384
2	吾妻連峰	39	40	41		270
3	飯豐連峰	41	44	45		296
4	鳥海山・飛島	44	46	47		412
5	出羽三山・葉山	47	49	50		423

1、朝日山地全図（一〇万分一接続図）。2a、吾妻連峰地質図（五万分一）。2b、吾妻連峰案内図（五万分一）。3、飯豊連峰（五万分一地形図接続図）。4、鳥海山・飛鳥（五万分一地形図接続図）。5a、月山・葉山地形図（六万三三六〇分一接続図）。5b、月山および葉山の植生附表—全数一二枚（第1、2、3、4、5、6、9、10、11、12、28、31表）。

1 朝日の全図は巻末に貼付。2

から4までの図は巻末に貼付けた袋に挿入。5の図と表は、本とは別に茶紙の書類袋内に収納。

輯により多少異なるが、二十八名から四十八名の専門家の調査団員が、植物・動物・地学・地理・考古等数班に編成され、「朝日」には陸水班がある。その他、気象・生活・産業・開発・山岳信仰・景観・登山・座談会等の項目がある。

後の輯ほどカラー写真の口絵が増しているのは当然で結構だが、チヨウカイフスマのだけは、最盛期のもっと多数見事に開花した時の、シャープにピントの合ったものだとよかつたろう。動植物等の採集品目録の表で、学名の次にすぐに続けて和名を書いているのは素人には少し探しくかったが、

「出羽三山」(一三七ページ以降)で種子植物目録の組版が、最初に和名、次に頭をそろえて学名が書かれた形式の表に改良され格段に見やすくなっているのは有難い。

誤植は少ないようだが、一つ気付いたことをあげる。Fraxinus tinusue MAKINO は手元の小図鑑(武田久吉著と前沢秋彦著の「高山植物」(共に保育社刊)に

日本名ノウゴイチゴ(能郷菴)と説明されているが、「鳥海」一〇一ページ、「出羽三山」一四九ページにはノウゴイチゴとある。この違いのわけを知りたい。また自然環境保全が段々具体的になって来たのも当然で、「踏みつけによ

る雪田草原の退行」の項が「出羽三山」八九ページに出て来たり、同書の座談会記事(四一九ページ)にも「国立・国定公園や天然記念物に：国の指定が官報などで公示されても、それに伴う行政措置の手がほとんど打たれない」との発言も現われたのはよい。

総括すれば、「鳥海」の大平氏のはしがきに「専門的な紀明に鑑らず、通俗的な視点に流れずという編集方針」と自ら言われている通り「総合学術調査」であつても堅苦しくなくて読み易く、山をより多面的に味わい愛するために何物かを求めようとする登山人が他の専門知識の一斑を学習したい場合に利用するに最適のシリーズであらう。

限定版頒布価格六〇〇〇円(送料別) 申込先 山形市旅籠町二五一一二 山形新聞社経理局 学術書「出羽三山・葉山」係 Tel 0236-22-5271 内線17 (一九七六年一月記 朝井一男)

星の北壁 近藤 等著

この本が出版されたのは昨年の五月だから、新刊紹介ではなく旧

刊紹介ということになったが、それでもやはり責任上、小生が筆をとることになってしまった。裏話をいうと、実は書評委員会でもいちはやく本書はとりあげられ、小西政継氏にまずお願いしたので、多忙だという理由で引受けてもらえず、それではというので、今度は佐藤久一朗氏にご依頼したので、またまたダメ。結局、お前はこれの本をもらっているのだらうといわれ、小生がまた登場することになってしまったわけで、大幅に遅れたという次第なのである。

前書が長くなってしまったが、本書は、一九七二年から七四年までの三年間のアルプス紀行であり、「シャモニの休日」、「アルプスの空の下」に次ぐ三冊目の著者のアルプス山行記である。三部にわかれていて、第一部は一九七二年の夏のアルプスで「コスミック・パットレスのある朝」など五篇、第二部は七三年夏のアルプスで、「快晴のツール・ロンド」、「ド

ナンダ・デヴィ縦走計画

ナンド・デヴィ委員会

ナンド・デヴィ委員会

ナンド・デヴィ委員会

ア・ド・レタラからプチ・シャルモ縦走」など五篇、第三部は七四年夏のアルプスで「プチ・カピュサン南東壁登はん」など六篇の登山記が収められている。

著者はいつている。「登山が本場のヨーロッパ・アルプスでは、わが国と違って、山登りは若い人たちのだけのものではない。日本では山で五十代の人にはめったに会わないし、テクニクを要する登山ともなればなおさらのことだが、アルプスでは五十代の登山者はざらである」——著者はすでに五十歳の半ばのはずだ。なおかつ、マッターホルン北壁の登はんを本気になって考えている。まことにたのしいといおうか、うらやましいといおうか。

それぞれの登山記の終わりに時間記録もそろえてあるのも参考になるだろう。

昭和五十年五月白水社発行、A5判、二二八ページ、写真多数。定価二〇〇〇円。(山崎安治)

ナンド・デヴィ委員会

ナンド・デヴィ委員会

二十四日富士山においてトレーニングを続けて来た。さらに一月二十日メディカル・スクリーニングが行われ、最終決定されたものである。一月三十日IMF宛に隊員名簿が送付された。IMFからはインド隊員の最終名簿が送られて来た。日本側は変更一名、追加一名の十四名、インド側は変更四名の七名、総員二十一名となった。

隊の編成については、さきに「山三五八号(昨年四月号)」に発表した計画にそって行われたものであるが、隊員氏名は左記のとおりである。

△日本側▽渡辺兵力(六一歳、総隊長、鹿野勝彦(三三歳、隊長、伊丹紹泰(二五歳、輸送・梱包)・磯野剛太(二二歳、装備・写真、小原俊(二九歳、会計、加藤保男(二六歳、渉外)、梶正彦(二八歳、渉外)、桐生恒治(二五歳、輸送・梱包・食糧)、小林政志(二六歳、食糧)、重恒夫(二八歳、酸素・装備)、関章司(三九歳、医師)・高見和成(三〇歳、装備)、寺本正史(二七歳、装備・通信)、長谷川良典(二八歳、総務)。

△インド側▽J・シン大佐、*KPB・シン少佐(医師)、*A・チャンドオラ大尉、P・チャクラバティ、*D・ラトウ(ダージリン登山学校教官、N・ピンジュ(ダージリン登山学校教官)、*プレム・チャンド。(印は新しく参加した隊員)

ナンド・デヴィ委員会

ナンド・デヴィ委員会

＊国内行動日程

一月十日より五トンにおよぶ隊荷を、大井埠頭の日通コンテナ輸送事業所に搬入して、梱包作業を隊員および若手会員の協力で行っているが、二月十日に一切の作業が完了し、運輸業者に引渡される予定になっている。以後の国内における行動予定は左記のとおりである。

二月下旬、一般隊荷横浜港船積。技術検討会。
三月上旬、危険物隊荷神戸港船積。
三月中旬、ボンベイ港隊荷引取

りとニューデリー移送のため先発隊出發。

四月上旬、IMFと諸打合せのため中発隊出發。
四月中旬、本隊出發。

＊募金活動

十一月初めより開始した募金活動は、一月二十日現在一三〇余名の会員各位のご協力をいただいている。しかし、まだその金額は大きいものではありません。重ねて会員各位のご支援をお願いします。なお、ご協力いただいた各位の芳名は、後日、本誌上に一括掲載

いたしますのでご諒承下さい。
前号でもお知らせしたが、五口（五千円）以上ご協力いただいた各位には、現地より日本・インド両国全隊員署名のナンダ・デヴィ峰ポストカードをお送りすることになっている。
＊送金は銀行または郵便局でお願いいたします。
銀行振込 三和銀行本郷支店、日本山岳会ナンダ・デヴィ委員会
普通預金 三五〇五八番
振替口座 東京三〇四八二九番
（記事欄にナンダ・デヴィと記入下さい）
（堀内章雄）

会員報告・委員会報告

ソ連でスキーを
——原 蕃氏の手紙——

一九七五年の二月下旬から二週間ほどソ連にスキーに行つて来ました。

『誰も書かなかったソ連』『収容所群島』等を読んだ行つたものから、一種の強迫観念みたいなものにとりつかれて、ある日突然に、スパイ野郎がどこからか現われて、汝を十年の刑に処す等と言われるのではないかと、憶測をたくましくしていたのですが、短かい期間で、しかもスキー場という山間僻地に限局された世界で

は、大変に親切で、居心地としては、ヨーロッパと少しも変わりませんでした。素朴なだけに、かえって気が楽で、楽しい旅でした。
スキー場としては、コーカサス山脈の中、チゲット山（三七七二m）とエルブルース（五六三三m）の二つの山に、リフトが合計七基かけてありますが、これはいずれも独立峰ではなく、連峰のうち比較的斜面のゆるやかなものを選んである訳です。

チゲット山の方はほとんど頂上近くまでリフトで登ってしまします。傾斜は比較的急で、面白く滑るのは二級以上というところでしょう。
エルブルースの方は三〇〇m

トルコ、イランとの国境に、エルブルース、アザウバシ（三四二m）、チゲット、カラバシ、ナクラタウ（四四五二m）、ドンダスオレン（四四三七m）の連嶺が屏立していて、最高峰のエルブルースを除いてはいわゆる針峰群に近い形をしており、いずれも氷河をまといまわっています。ここに登山学校を設立してあるのも宜なる哉と思われました。

一日を割いて近くの「ヘリシダの谷」にある登山学校に、かつてこの校長をやっていたというマレーノフ氏の案内で行って見ました。冬期は休講の由でしたが、彼はこの山群の縦走路、パリエーションルート等に就て大変楽し気に説明してくれました。帰路家に寄らないかという彼の言葉に従って、テレスコールにある住居に寄り込んで、夜おそくまで遊んで来ました。

アパート住いで、いわゆる2DKですが、居室、寝室の外に台所と工作室（ほとんどの工作機具が備えつけてあるのには驚きました）があつて、優雅な生活で、スポーツマスターともなると年金は普通人の倍額で月額十二万円になる由です。コーカサス山群の開発に非常に熱心なようでした。またコーカサス地方は名だたる長寿の国で、彼は六十三歳だそうですが、まだまだ七十歳までは元気でスキーをやります。

梓会年次だより

茶谷 東海

昭和五十年は故田部重治先生（日本山岳会名誉会員）指導の下に海軍経理学校に山岳部梓会が創立せられてから六十周年に当るので次の記念行事を行なった。

一、講演会

五月四日（日）水交会に三十名が出席して記念講演会を開催し、次の三先生の「田部重治と山」についてのお話を拝聴した。

元日本山岳会会長 日高信六郎
山岳作家 安川 茂雄
同 瓜生 卓造

安川先生は田部さんから貰ったステッキを持参して、それに添えられた田部さんの興味深い手紙を披露された。海軍の連中は声が大きいので、筆者がついうっかりマイクの用意を失念したため、上品なお声の先生方にはご迷惑だったこととお詫びしたい。そのあと三

先生に梓会のバッジを贈呈して乾
盃した。会食後、年次総会に切替
え、次の人事を承認した。
名誉会長 等松農夫蔵
(前会長)

会長 新井 克巳
(前副会長)

筆者も万年幹事から副会長に進
級した。

二、谷川岳登山

八月二日(土) 六十二名(うち
女性十八名、園児一名)が団体列
車で上野発、水上下車、公務員保
養所水明荘泊。翌三日(日) 左の
編成で谷川岳へ登った。

○隊長 新井会長 副隊長

○第一班(天神尾根往復) 三歳
より七十五歳まで四十八名。

○第二班(巖剛新道―西黒尾根―
天神尾根) 十四名。
リーダーは第一班は田代元防大
山岳部リーダー、第二班は長谷川
前防大ワンダーフォーゲル部長、
ドクター一名、看護員一名同伴。

天神尾根は数年前ロープ駅より避
難小屋まで木道ができていっそう楽
なコースとなっている。

快晴で、案じていた夕立も雷鳴
もなく、肩の小屋で水の補給もで
き(翌日は補給止め) 快適であっ
たが、水上駅より土合ロープまで
のバスの始発が午前八時を過ぎた
ことは不便。

三、家族向きハイキング

十一月十六日(日) 四十五名で

東逗子駅―神武寺―鷹取山―田浦
駅を歩き、途中鷹取山の岩場で防
大山岳部OB木村一尉らより、ロ
ッククライミングの基本的講習を
受けた。

四、記念メダルの頒布

創立六十周年と谷川岳登山
を記念してメダルを作成し希望者
に実費三千元で頒布中である。制
作はラマーノ社の中川武氏。

五、来年の計画

(一) ハイキング

○奥武蔵 武川岳―二子山

○丹沢 二の塔―塔ヶ岳

(二) 登山学校の幼稚園程度の研究班
の設定

終りにこの一年、記念行事に示
された日本山岳会のご支援に対し
深く感謝する次第である。

ルームで忘年会

七十名の参加

―にぎわいの十二月十九日―

日ごろ静かなルームも、この日
ばかりは七十名の参加者の、笑い
歌い、食べ、飲みで、われるよう
なにぎやかな一夜となりました。

例年のプレゼント、手紙の交換
も、アイデア賞をさしあげたいよ
うな傑作が続出し、笑いこぼれる
一幕もありました。例年のことな
がら、ご婦人の参加が少なく、も
っと多くの方に参加していただい
たら、ラブレターもより楽しくな
るのではないかと思います。

また五十一年の二大行事である

カメット隊、ナンダ・デヴィ隊の
ためにと催したバザーも、気前の
よい買いっぷりにまたたく間に五
万三千四十円を売り上げ、その場
で折半して両隊責任者に手渡し、
大変喜んでいただきました。

当日のため、会員諸氏から新巻
サケ、みかん、おすしを、バザー
のために手作りの手袋、帽子、自
作の絵、写真、民芸品、その他数
多くの品々を寄贈いただきました。
厚く御礼申し上げます。

△参加者▽浜野、中、松本、織内、
北島、朝井、沼倉、長谷川、小
重、西村、山崎、東、岡沢、菅野、
鈴木、遠藤、十野、山口、秋田、
須田、柳沼、高橋、高遠、森川、
田中、白井、日高、細川、金坂、
渡辺、三好、大谷、西奥、西丸、
小原、入沢、池田、奈須、梶、三
渡、渡辺、前田、小林、富藤、飯
田、勝田、千葉、浜田、岡、山本、
進藤、杉山、市村、高井、大塚、
中垣、中川、神崎、黒石、小林政、
黒沢、橋本、東原、関口、清水、
佃、高本、磯野、梅野。(宅間記)

小林義正氏を しのぶ

山崎 安 治

山の書物の権威として知られて
いた小林義正氏が昨年十二月十四
日に亡くなりました。小林さんとの
おつき合いは、小生などあまり古
いことではないが、山の本のこと

についていろいろご教示を受けた
り、丸善におつとめの関係から洋
書の購入について何度か便宜を
はかっていただいた。また日本山
岳会の図書委員会委員長として、
長いこと私たち後輩の指導にあた
っていただいた。

小林さんが山岳図書蒐集の第一
人者であるということは、かねが
ねうかがっていたし、唯一の著書
となっていた『山の書物』―
正統―を通じて、小生など平地か
ら巨峰をふりあおぐ思いでいたも
のである。図書委員になられてか
ら一度蔵書の拝見にうかがおうと
いうことになって、野上成男、近
藤信行氏らと聖蹟桜ヶ丘のお宅を
訪れたことがある。もう四、五年前
になるだろうか。小林さんはいか
にも楽しそうに書庫を案内され、
こちららただその蔵書の豊富なこ
とに驚くばかりであった。

その後何度かお宅にお邪魔して
山の本のお話をうかがったが、さ
きおとしだったか、やはり近藤
氏らとおうかがいしたとき、イギ
リス第一回エベレスト隊のベリ
隊長の手紙や、富士山の錦絵など
をいただいたことがあった。その
ころはもう、お身体もかなり不自
由になられ、庭の散歩がどうやら
出来るということであつた。

一昨年の十一月、厚木のリハビ
リテーションに入院されていたと
き、例の『覆刻日本の山岳名著』
のことで近藤氏と同道、婦人懇談

会の清水晴美嬢の案内で、お見舞
いかたがたご相談にあがり、お話
をしたのが最後となつてしまっ
た。まだ会としてはたくさん小林
さんにお話ししたいこともあつた
し、まことに心残りではない。

新潟県小出でのサケをたべる
会、あるいはこれも数年前、横山
厚夫氏の肝いりで氷川の奥多摩山
岳会の山荘を借り切つての図書委
員会の懇談会で、若い連中を相手
にいかにもうれしそうに食べ、か
つ語り、奥多摩では、お得意の義
太夫なども披露された元気なお姿
がいま目に浮かんでくる。

亡くなられたと聞き、本箱の横
にしまっておいた、いただいた富
士山の錦絵をまたひろげてみた。
『三国一の山』三枚つづき、とあ
り、玉蘭と書いてある。調べるこ
とで、江戸末期の富士山大宮口登
山の図であり、当時の登山風俗も
くわしく書き入れられている。大
変なもの頂戴してきてしまった
ものである。

謹んでご冥福をお祈りする。

昭和五十一年二月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社

発行所 日本山岳会

発行人 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(813)二八六代表

東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

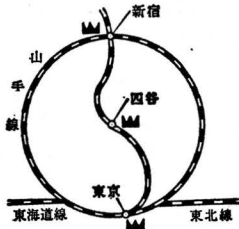
●買い易い
山の店

山の店

●北へ来たたら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうして
要るものがある。
なまじろ人間でずかり
おしるて、山とすか
どうして、必要なもの
をこころえ、まゐる
まゐるは、もていませ

かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上-丁目4-7 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



新刊

山がとりもつ種々の書物とのめぐり合い。
その本を通しての心暖まる人との交わり。
ながい年月、本に親しんできた著者ならで
はの興趣深い書き下ろし。

島田巽著

山人本

A五判三七四頁
定価二四〇〇円
二四〇〇円

山・人・本―五十年のつき合い―

ひとつの出会い、『青春の山』
etc.昭和はじめの開花期、
山岳図書展覧会のこと…ほか
リリーダーと人柄、山旅の伴侶、
コロネーション・エウエレス
ト、登山家ノイスの死…ほか

プロフィール
小泉信三先生と山、関口泰氏
の山、深田さんを想う、ギド
・レイのこと…ほか

読後偶感
Alpine Days and Nights (by
W. T. Kirkpatrick) 山岳展
望(深田久弥)、スマイスの新
著二つ…ほか

●既刊
渡辺公平著

山は満員

A五判三六〇頁
定価二、二〇〇円
二二七〇円

一九七六年版
山日記

日本山岳会編
A六判四〇〇頁
定価九五〇円

しゃれたプレゼントカードができました。

●お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ!

茗溪堂 〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台二ノ一
電話 〇三―五二―九四三 振替東京 〇二四三三

会務報告

12月理事会

(12月6日午後1時本会ルーム)
 △出席者 今西会長、織内、望月、各副会長、浜野、高遠、山本健、小倉、山本良、大森、皆川、大倉、黒石、神崎、橋本各理事、小原、浜野、折井各評議員、委任 近藤、原、田村、後、浅田各理事、太田監事
 △議案
 ・本会ルーム家賃値上げについて
 (山本健)
 家主より正式の申し出あり、更改時にある程度の値上げに依ることと交渉する

・年次晩餐会について (高遠)
 出席予定者三百九十九名、プログラム内容説明
 丁承

・「島田 巽氏著書」への本会出版物よりの転載について (高遠)
 丁承

ルーム日誌

(50年12月)

- 1日(月) 集會委員会、婦人ヒマラヤ研究会
- 2日(火) 山岳編集委員会、婦人ヒマラヤ研究会
- 3日(水) 学生部
- 4日(木) 常務理事会、ナンダ・デヴィ委員会
- 6日(土) 理事会、支部長会議、年次晩餐会
- 8日(月) 集會委員会、婦人ヒマラヤ研究会
- 10日(水) 学生部
- 11日(木) ナンダ・デヴィ委員会
- 15日(月) 集會委員会、婦人ヒマラヤ委員会

会員異動

物故者
 六七二 石田 吟松 (50・11・6)
 一三七八 小林 義正 (50・12・14)
 退会者
 六五九七 本間 克郎 (50・12・25)

☆☆☆海外通信☆☆☆

イタリア国際映画祭のお知らせ

イタリアのイタリア山岳会とトレント市々は、例年行なっている第二十回国際映画祭(山岳・探検など)フェスティヴァルを、来る一九七六年五月二日から八日まで、イタリア・トレント市において開催すること、については日本からも、ふるってこのコンクールに参加されたい旨、通知が日本山岳会宛にありました。
 ●申込先 左記トレントで、一九七六年三月三十日必着となっています。
 International Festival of Mountain and Exploration Films, "Città di Trento" via Verdi, 30 38100

TRENTO, ITALIA

●フィルム送り先 左記ミラノで、申込先とフィルム送り先が別々なのを注意下さい。
 Festival Internazionale Film della Montagna e dell' Esplorazione c/o A-A Trasporti via a. da Recanate, 4-20126

MILANO, ITALIA
 右フェスティヴァル参加規定と申込書式とは山岳会事務所にあります。
 (海外連絡委員会イタリア係牧野文子)

●お知らせ

第4回山岳史懇談会

「旧制甲南高校山岳部の足跡」
 講師 香月慶太、田口二郎氏他
 日時 3月17日(水)午後6時半より

場所

本会ルーム
 昭和初期の穂高、鹿島槍、不帰、剣等のヴァリエーション開拓期のエピソードを中心に、本会々員としても活躍された物故会員とくに伊藤、田口一郎、伊藤新一諸氏の想い出なども話していただく予定です。
 (図書委員会)

第7回山岳圖書を語る夕べ

「谷文晁・名山図譜をめぐって」
 講師 関根吉郎氏
 日時 3月30日(火)午後6時半
 場所 本会ルーム
 「山」三六二号(昨年八月号)でお知らせした日時は変更になりましたので注意ください。
 (図書委員会)

北海道支部

新年小集会

一月十四日午後六時から札幌のエルム会館で開催。大塚支部長から新年の挨拶のあと七十周年記念式典で、伊藤前支部長が名誉会員に推薦されたと報告され、名誉会員章が披露された。
 平野氏は伊藤秀五郎氏から託された竹田津実著『キタキツネ・北辺の原野を駆ける』(平凡社刊)に寄せられた詩を朗読された。

草原の生きものたち

風が光る
 風の中に草原の花々と
 動物たちは生きてゐる
 明るく
 楽しく

ときに厳しく
 草原の季節の風の
 ささやきこそわが命

その光こそわが心
 生きものたちはさういつて
 音もなくオホーの彼方に沈む
 夕陽のなかに
 一日の終熄を迎へる
 何事もなくつたかのやうに

草原を吹く風は明るく
 草原を渡る風は冷たい

昭和五十年十二月二十七日、小川君を通じて、本書を著者から贈られた日、これを読みながら、ふと、「風光」という、テーマが浮び、その夜中、この詩を作る。一冊の本を読んでその著者のために詩を作ったのはこれが

「山の本」の売場はお茶の水店三階です。

とくに海外登山の記録と報告書及び、東京以外で発行された本などを取り揃えるよう努めています。最新入荷の一部を紹介いたします。

茗溪堂

電話 〇一〇一 東京都千代田区神田駿河台二の一
 〇一〇一 振替東京へ一四三三

- ・登高行 一九七四、慶応義塾体育会山岳部五、〇〇〇円
 - ・両神山―風土と登山案内―飯野頼治著 一、五〇〇円
 - ・るり色の山麓、青柳健詩集 もんだにゆか 一、五〇〇円
 - ・スイス・ベルナールプスの岩場 一、八〇〇円・三井松房「遺稿と追憶」二、五〇〇円・川村博道「素人先生」二、五〇〇円・ほか
- 営業時間は平日・午前10時30分より午後8時、日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分です。

●新刊図書受入報告

(1975年7月～8月)

<7月受入れ分>

洋雑誌

Die Alpen	No. 6
Alpinismus	'75-6
Appalachia	V. 40-3 40 (3)
Der Belgsteiger	'75-5,6
The Canadian Alpine Journal	No. 58
Deutscher Alpenverein	27 (3)
Kankoku Sangakukai	No. 20 (1975.4)

和雑誌

釧路市湿原総合調査報告書

あしなな	No. 146
白 鳳	No. 5
北海道自然保護協会会報	No. 18
兵庫山岳	No. 99

国立公園

京都山岳
山 嶺
自然保護
低 山
東海山岳
登山月報
山と博物館
山と雪
アルプ
地 図
岩と雪
山と溪谷
古地図研究

No. 308
No. 603
No. 543
No. 157
No. 121
No. 3
No. 76
Vo. 20-7
No. 206
No. 209
No. 338 8月号
No. 44
No. 443 8月号
No. 5, No. 6

Climbing

'75-7/8
Deutscher Alpenverein Vo. 27-3
The Himalayanclub Newsletter No. 30
la Montagne V. 99-1
Osterreichischer Alpenverein V. 30-5/6
Panoramader Slowakei '74-6, '75-1
Rivista Mensile V. 96-3
Union International des Association Bull. No. 65

和雑誌

C.M.C. レポート No. 306, 307, 308, 309
H.K.T ニュース No. 17
北海道自然保護協会会報 75-19
兵庫山岳 No. 99
いこいの山岳会月報 No. 169
国立公園 No. 308

(以下次号)

<8月受入れ分>

洋雑誌

Die Alpen	No. 5
Alpinismus	'75-7
Appalachia Bulletin	41-7
Der Bergsteiger	'75-7

原稿募集

『山』では、読者、会員各位からの原稿をお待ちしています。

紀行、随筆、研究、詩歌、山行報告、写真、カット、身辺雑記など、山に関する内容ならなんでも結構です。

* 原稿用紙(四〇〇字詰め)五枚程度を原則としますが、内容によって長短は自由です。

* 締切りは発行月の前々月末ですが掲載時期に特に希望がある場合はその旨添書してください。

* 編集の都合上、原稿の掲載順が多少前後することがありますのでご諒承ください。

* 原稿は、日本山岳会会報編集委員会宛にお送り下さい。

* 原稿は特に指示がないかぎり返却致しかねますので、ご諒承下さい。

『山』編集委員会

最初である。

札幌医大耳鼻科病室で

伊藤秀五郎

次いで昨年海外で活躍された三氏から、8ミリ、スライドが上映され、遅くまで歓談が続いた。

ヒマラヤ・ブラマールII峰登頂

北大ヒマラヤ学術調査 辻井達一
日米合同アリエーシヤン学術調査 佐々保雄

出席者・佐々保雄、平野明、可知邦成、金井五郎、小林年、高沢光雄、野田四郎、辻井達一、今健一、朝比奈英三、大塚武、石崎貞子、保田信紀、芳賀孝郎、阿部淳、計良幸作、山川力、新妻徹、青木隆信、川越昭夫、佐々木孝雄、浅利欣吉、伊藤寿雄、萩谷三枝子 (高沢光雄)